

研究ノート

## ヒロシマ原爆被害者の人生を支えたもの (2)

——自由発言からみたキーワードの意味——

森田 裕司\*・一丸藤太郎\*\*・大澤多美子\*\*\*

倉永 恭子\*\*\*\*・財満 義輝\*\*\*\*\*

中嶋みどり\*\*\*\*\*

### 1. 問題と目的

ヒロシマ原爆被害者は、被爆後の人生をどのように生き、そしてさまざまな困難や危機をどのように乗り越えてきたのだろうか。人生において何が支えであったかを明らかにするために、研究(1)では、被爆者396名と非体験者116名を対象に、「モットー」「座右の銘」「大切にしてきたこと」について、聞き取り調査を行った。対象者が語った回答内容から、人生を支えたと考えられる言葉を抽出し、キーワードとした。得られたキーワード(被爆者535個、非体験者120個)を、被爆者・非体験者別にKJ法を用いて分類し、両群を比較した結果、被爆者のみにみられたキーワードのタイトルは、表1のとおりであった(研究(1)の詳細は中嶋・一丸・大澤・倉永・財満・森田, 2011, および森田・一丸・大澤・倉永・財満・中嶋, 2012を参照)。

われわれは、これをさらに一歩進めて、研究(1)で被爆者だけにみられたキーワードのタイトルが、それぞれ被爆者の何を反映し、どのような意味をもつのかを明らかにしたいと考えた。その際に重要な素材になると考えられたのは、

表1 被爆者のみにみられたキーワードのタイトル

大タイトル	小タイトル
生活信条	前向き・自分のペースで・くよくよしない・なるようにしかならない・負けたくない・今を大切に
人間関係	和
家族	子どもの成長・家族への役割/責任・親等の言葉
生きる価値	感謝・奉仕・平和
原爆体験の受け止め方	生かされているという気持ち・運命・考え込まない・原爆のことを考えない

※明朝体の大タイトルは非体験者にもみられたもの

被爆者の「自由発言」である。「自由発言」とは、研究(1)において対象者がキーワードとともに自発的に語った補足発言である。そこには被爆者の人生の様々な局面における心理的実態を解明するために非常に貴重で豊富な内容が含まれていると考えたからである。

そこで本研究では、研究(1)でみられた被爆者のキーワードのタイトルが意味するものについて、「自由発言」をもとに、詳細に検討することを目的とした。

### 2. 方法

研究(1)で被爆者のみにみられた大タイトル、小タイトルがそれぞれ、被爆者だけにみられたのはなぜか、被爆者にとってどのような意味をもつのかについて共同研究者6名が協議し、

\* 広島経済大学経済学部教授

\*\* 広島国際大学大学院心理科学研究科教授

\*\*\* 広島市子ども療育センター発達支援部長

\*\*\*\* メイヘン心理相談室室長

\*\*\*\*\* 広島修道大学人間環境学部教授

\*\*\*\*\* 広島国際大学心理科学部助教

可能な限り多くの仮説を立てた。次に、その仮説を裏づけると考えられる被爆者の自由発言のデータを拾い出し、列挙した。そしてデータに基づいて仮説を適宜修正し、また裏づけるデータがない場合は仮説を棄却した。以上の手続きを繰り返した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 自由発言からみたキーワードの意味

表1のタイトルを大タイトルごとに、あるいは大タイトルの中のいくつかの小タイトルごとに分け、方法で述べた手続きによって得られた仮説と、続いてそれを裏づけると考えられる自由発言の例を記述する。

##### 3.1.1 生活信条

「前向き」「自分のペースで」「くよくよしない」「なるようにしかならない」「負けたくない」「今を大切に」

被爆者には、大タイトル「生活信条」の中に、多様な小タイトルが見られた。これらのタイトルはすべて、過去のネガティブな体験を振り返らず、現在や未来だけを見て生きていくという点が共通している。

生存競争ともいえる過酷な状況の中で、被爆者が今日、明日を生き延びるための日々の営みで精一杯だったことの反映であると考えられる。

例) 「被爆時は自分のことで精一杯だった。14歳という若さが自分を支えてくれた。前へ前へと進んでいくので精一杯」(78歳男性)  
「生きていくためには何でもしようと思った。仕事には何にでも飛びついた」(80歳男性)  
「どう生きていくか、どう生き抜けるかという動物的としか言いようのない駆け引きの才覚で生き抜いてきた」(82歳男性)「目の前にあることをとにかくこなしてきた。目の前のハエを追い払うのが精一杯だった」(83歳女性)

被爆者は、家族の喪失、怪我、病気、周囲の無理解や差別などの様々な過酷な局面に置かれてきた。「くよくよせず」「なるようになる」と考え、「負けたくない」気持ちで立ち向かうことによって、困難を乗り越えたと考えられる。

例) 「原爆で父を亡くし、父がいたら…と思うことはあった。自分一人だけがそんな目に遭ったわけではないので。とにかくくよくよせず」(78歳女性)「私なりにいろんな目に遭わされてきた。波乱万丈の人生を生き抜いてきたが、あまりくよくよしない。落ち込みたくない」(77歳女性)「助けられたことに感謝をして、くよくよせず、何かをして忘れるようにしてきた。何もせずにボーッとしているとよいことはない。そう考えて生きてきた」(78歳女性)「原爆を体験したことで差別的な発言も受けたが、とにかく自分は口を動かし体を動かしやってきた」(81歳男性)

##### 3.1.2 人間関係

「和」

このタイトルの中には「争わない」という表現をした人も15名中5名含まれていた。周囲の人と争わず、「和」の心で協調していくことは、被爆者が孤独や差別から身を守り、安心して地域社会の中で生活していくための知恵であったのではないかと考えられる。

また、被爆者が同じ学校や同じ地域の者どうしがつながることで、互いに支え合い、安心感や心強さを得てきたからではないかと考えられる。

例) 「なるべく争わないということを大切にしてきた。そしてなるべく人に迷惑をかけないようにした」(71歳男性)「皆同じだから、我慢も苦勞を耐えることもできた」(71

歳女性)「被爆当時の女学校の友達との関係を大切にしてきた。今でもよく集まっては話をしている」(78歳女性)「近所の人、友達と仲よくして和気あいあい。助け合って生きていくこと。以前から人のつながりが大事だと思っていた」(80歳女性)「みんなとの和を大切にしている。町内会などに積極的に参加して、役員等もするようにしている。いろいろな人がその仕事や苦勞を知ること、お互いを気遣い合えるのではないかと思う」(75歳男性)

### 3.1.3 家族

#### 「家族への役割・責任」

被爆者の多くが家族を失った。家族成員の喪失によって家庭内の自分の役割(親代わり、親のためになど)が大きくなったためと考えられる。

例)「8月6日に父が家の下敷きで死亡、1か月後に母も死亡。乳飲み子を含む弟妹とともに残され、妹たちを支えんといかん、という気持ちが自分の支え。母が亡くなる時、遺言で『妹を頼む』とも言われた」(72歳男性)「父親代わりとして頑張らないと、という思いでやってきた。父親がいないということで、妹達に恥ずかしい思いをさせたくなかった」(73歳男性)「母代わりに弟や妹を育てなければいけないと必死で働いた」(77歳女性)「自分は父に悲しい思いをさせないように被爆者であることを隠し結婚した」(72歳女性)「育ててくれた祖母と弟の世話をし、生涯未婚だった」(72歳女性)「大変だったときに、兄弟結束していたから今も仲良くやっているのだろう」(79歳男性)「唯一人の男子が原爆で亡くなったために家を継いで親族をまとめた」(79歳女性)

#### 「子どもの成長」「親等の言葉」

被爆者は、家族を失えば失うほど、家族の大切さやありがたさがより増したのではないかと考えられる。特に女性は「子どもの成長」を見届けたいという気持ちが生きる希望や支えとなった。また親の教えや親族の温かい言葉も強い支えとなった。

例)「子どもが自立するまでは生きていこう」(78歳女性)「子どもさえいれば幸せ」(80歳女性)「父の『負けたらいけない。人を頼らず自分たちで生き抜こう』という教え」(73歳女性)「疎開先の叔父が『おまえはここにおりゃあええ』と言ってくれた言葉。ありがたく、自分も人にそうしたい」(73歳男性)

### 3.1.4 生きる価値

#### 「感謝」「奉仕」

生き残った奇跡、人に助けてもらった体験、人から恩を受けたことなどから深い感謝の気持ちが生じ、人のために生きたいという価値観に到達したと考えられる。

例)「とにかく自分の命があるのもみんなのお陰。自分の命があるだけでとにかく感謝しなくちゃいけない。亡くなった人には気の毒だけれど」(81歳女性)「感謝の気持ちでいかなきゃいけないと思う。みんなの犠牲のもとで生きさせてもらっているのだから。あのときの犠牲で今があると思う」(79歳女性)「生き残れた分、人のためになるように生きていこう」(75歳女性)「隣で作業をしていた人は即死だった。命をもらったことが嬉しい。自分は生かされたので、人のために生きたいと思って、当時は火傷や死傷者の世話を必死でした」(79歳女性)「恩返ししたい人は皆いないから、他の人に

返している」(77歳女性)「今まで生きてこられたことは『与えられたもの』と思い、日々ありがたく平和を祈って過ごしている」(73歳女性)「校舎の下敷きになってしまった級友たちには『すまない』と思い続けているが、自分は生きていられてよかったと感謝している」(73歳男性)「感謝を形に表すようにしている。あしながおばさんとして若い人の経済的支援をしている」(81歳女性)「死ぬべき人間が生きて帰った、と思って大切に生きています」(83歳男性)

#### 「平和」

「和」よりもさらに普遍的な人間の価値観である。被爆者だけが自発的にこの言葉を発している。平和の大切さは殆どの人が肯定するであろうが、被爆者にとって「平和」はもっと切実なものと考えられる。それは、自分の存在や安全感を脅かされないようにするためのものであり、また、原子爆弾のもつ残忍さや非人道性を身をもって体験したからこそ、二度と誰にもこのような目に遭わせてはならないという強固な意志が形成されたのではないかと考えられる。

例) 「とにかく平和が大事。もう原爆のようなことがあっちゃいけない。戦争はもうないのが一番。平和が一番」(74歳女性)「原爆は許してはいけないと思う。平和であってほしいと思う」(77歳女性)「もう戦争はしてもらいたくない。原爆・核兵器はなくさないといけない。あんなのは無差別で、逃げようがない。機会を見てそれを伝えていきたい」(77歳男性)「平和のために一生を捧げて暮らすことが人間のあり方、集団のあり方と思う。戦争を止められるかどうかは、一個人の力ではどうもならないが、社会の1つの歯車になっていればよいのではないかと思う。アメリカを今さら恨もうと

か思っても仕方がない」(76歳男性)

#### 3.1.5 被爆体験の受け止め方

「生かされているという気持ち」「運命」

なぜ自分はあるような過酷な目に遭い、苦しみ、そして生き残ったのか。決して納得できる答えがないであろう問いに、最終的には「生かされている」「運命」と捉えることでしか、折り合いがつかない。無力感に耐えた末の諦念のようなものと推測される。

例) 「避けて通れない運命だったのだと思う」(77歳男性)「ここまで来れたのは精神力で。生かしてもらったんだから大事にしなきゃと思って。諦めもあるが、これが運命だろう」(79歳女性)「原爆などもこういう運命なのだと思うってきた」(72歳男性)「両親を幼くして亡くしたことで苦労はたくさんしたが、最終的には運命、仕方ないと思うしかない」(72歳男性)

被爆後の人生を振り返って、人生の意味や自分の役割を考える中からそのように感じる。

例) 「生き残ったのは家族を看取るためだったのではないか、という不思議な思いをしている」(80歳男性)「大変なことも、与えられた試練だと思って生きてきた」(83歳女性)「自分が原爆に遭ったのも何らかの意味があるので、子どもらに伝えたい」(77歳男性)

亡くなった人の分も生き延びなければならぬという思い。

例) 「家族は死んだが私は生き残った。その分まで頑張らなければならぬと懸命に生きてきた。一度は死んだ人間と開き直って」

(77歳男性)。「罪のない人が犠牲になった。亡くなった人のために自分が何ができるか」  
(74歳女性)

生き残った自分は、原爆のことを人々や後世に伝える責任があるという捉え方。

例) 「こうして辛い体験を話していくことは、生かされている、生かされたことに対する責務であると思っている」(80歳女性)「原爆のことについてあまり話してこなかったけど、伝えていかなければいけないと思う」(73歳男性)「思い出したくない体験も語っていくことを決めている。今もその光景は目に焼きついている」(79歳女性)

原爆体験やその後のさまざまな影響を乗り越えることで多くのことを学び、人間的成長を遂げることができたと考える人、信仰を得た人もおり、「心的外傷後の成熟」(Post-Traumatic Growth)をもたらしたと見えよう(池埜ら、2007)。

例) 「波乱万丈の人生を生き抜いてきた。わりと困難を乗り越えてきている。原爆に遭って心が強くなったのかなと感じている」(77歳女性)「原爆があるからこそ、その後前向きに考えるようになった。親孝行もした」(79歳男性)「あんな地獄絵のような体験をただけに、少々のことは平気」(79歳男性)「信心。死んだ人の哀れさを体験して、命を大切にせんといけんというのが自ずと浮かんできた。前向きに生きてきた。人生の終点の先まで見て生きている」(78歳男性)「仏法を信じてきた。被害に遭う者と免れる者がいるという因縁を感じてきた」(83歳男性)「仏様を大切にすること。何か目に見えない大きな力で守られている

ように思っている。人生に悔いはない」(77歳女性)

「考え込まない」「原爆のことを考えない」  
原爆体験は理不尽すぎて、どのように捉えればよいかわからないできごとであり、向き合っ  
て考えるのはあまりに苦しい。できごとの記憶  
になるべく目を向けないように置いておき、触  
れないようにすることで、何とか精神的に生き  
延びることができたのだろう。

例) 「被爆後うつ状態になり、家に引きこもっていた。2年で回復した。原爆のことは考えないようにしてきた。思い出したくないもの、話もしないようにしてきた」(78歳男性)「避難中にたくさんの死体や火傷で皮膚が垂れ下がったお化けのような人達を見て、生き地獄と感じた。現在でも原爆の体験はできるだけ思い出さないようにしている。数年前まで8月6日にどうしても外出できないくらい生々しい体験として記憶に残っていた」(78歳女性)。「人間とは思えない姿や人間が燃えている場面を目の当たりにし、それから3年間程その場所を通ることができなかった。物事を深く考えない性格のお陰で、思い出したくない過去を抱えながら生きることができた」(74歳男性)「毎年8月6日前後1週間くらいふさぎ込んでしまうようで、夫は短歌に『妻はPTSD…』と詠んでいた」(73歳女性)

考えないようにするのは体験の記憶だけでなく、その後のさまざまな苦しみや障害や病気などと原爆体験とを関連づけないようにしてきた。

例) 「原爆とその後の人生を意識的に切り離している」(74歳男性)「娘が脳性マヒで生まれてきた。原爆の影響があったかもしれ



ないと悩んだこともあったが、誰に言っても仕方ないので、多くは話していない。娘の子どもダウン症で自分の人生は真黒だと思った」(82歳女性)「いつ原爆症になるかわからない不安はあったが、考えても仕方ないし前向きに生きてきた」(78歳男性)

しかし、目を向けず考えないできた体験は、後の人生の類似の体験を引き金にして、突然再びフラッシュバックとなって被爆者を襲うことがかなりある。体験を避け続けることはなかなか容易ではなく、長年にわたってその影響に苦しんできたことも明らかになった。

例) 「第五福竜丸のニュースのときに不安になった」(79歳女性)「調査依頼の電話から眠れなくなり、克明に被爆当時のことを臭いや風の感触まで思い出した」(80歳女性)「最近自宅の近くで全焼の火事があり、1週間ぐらい原爆のことが思い出されてドキドキしたり、焼け跡を見るのが辛かった」(78歳女性)「定年後、原爆ボランティアをしようと資料館を見学したら、一気に記憶が甦って圧倒されてしまい、原爆に関するものに近づけなくなった」(72歳男性)「娘が大震災にあったときは、原爆のこととダブって、当時の火傷を負った人が思い出されて娘の所に行けなかった」(72歳女性)「毎年8月6日になると前後1週間くらいふさぎ込んでしまう」(73歳女性)「50歳頃から被災者のお化けのような姿がふと浮かぶようになり、忘れたくてお酒を飲んだり、思い出すのが怖くてラジオをつけたまま寝たりしている」(75歳女性)

### 3.2 体験を語ることの意味

今回の面談調査で、被爆体験や思いを「話せてよかった」「すっきりした」という被爆者が少

なくなかった。中には初めて人に話したという被爆者もいた。今までは、思い出し向き合うことへの怖れや、差別への怖れもあったと推測される。本調査により、被爆者は比較的安全な形で語る機会とその相手を得たのかもしれない。調査の実施主体が広島市という公的機関であり、また面談調査者を臨床心理士が担ったことが安全感に寄与したのではないかと思われる。さらに、被爆者が高齢化し人生の後期を迎えたことも、語り伝えたいという動機につながったと考えられる。

例) 「原爆の話をしたのは初めて」(80歳男性)「妻も被爆者であるが、お互いに触れたくない過去だったので、原爆のことを話しかけたことはない」(74歳男性)「今まで身内以外と原爆の話をするとはなかったが、伝えていかねばならないかとも思い始めた」(77歳男性)「思い出さないようにしてきたことを思い出してしまったこともある。でもこうして話ができなのは嬉しい」(73歳男性)「最近やっと原爆体験を人に話せるようになった。後世に語り継いでいかないといいけないと思うようになった。来るまでは不安だったが、今日は全部吐き出せてすっきりした」(78歳男性)「話したので心のつかえがすっととれた感じ」(79歳女性)「結婚してからも原爆のことは口に出さずに頑張ってきた。今日のように色々話すのは初めて。話せてよかった」(73歳女性)「普段は話さないことを話したのは、あなたが話しやすい人だったから」(82歳男性)「先日、自分の体験を手記にまとめ、雑誌に載せてもらった。自分でも何か役に立てたかな、と思った」(76歳男性)「原爆のことは若い人に伝えていった方がいい。体験はそこまで大変ではなかったが体験は伝えるべき。初めて、原爆の話をした」(78歳女性)「今

まで、夫にも、聞かせてほしいという孫にも原爆体験について話したことがなかった。話すことから逃げたいとずっと思ってきた。話して思い出すことが辛いと思ってきたが、今日話してよかった。話したので忘れられそう」(79歳女性)

調査をきっかけに被爆体験を詳細に思い出した人もいた。辛い記憶がよみがえらないように、まさに「無意識に」巧妙に避けてきたと考えられる。以下はその典型例である。

例) 「調査依頼の電話から眠れなくなり、克明に被爆当時のことを臭いや風の感触まで思い出した。しんどい思いをしたが、なぜ今まで思い出さなかったのかが不思議。8月6日にはそういえば広島にいたことがない。無意識に避けていたと思われる」(80歳女性)

#### 4. ま と め

(1) 本研究では「自由発言」を丁寧に検討していくことによって、被爆者の長年の人生におけるさまざまな苦しみや困難、そしてその中を被爆者はどのように生き、何を支えに乗り越えてきたのが、より豊かに浮き彫りになった。それらは多様であり、かついくつかの共通点も見られた。

(2) 被爆者の原爆体験へのもっとも重要な対処法は、できごとを考えないように、目を向けないように置いておく「回避」の心理機制を働かせることであることがわかった。

(3) 一方で、被爆体験と類似のできごとによって引き起こされる記憶の想起(フラッシュバック)が被爆者を苦しめてきたことも、多くの自由発言から明らかになった。これより、上述の回避の重要性は、実際には回避し続けることがいかに困難であるかという事実を同時に示

していると考えられる。

(4) 被爆者が「感謝」「奉仕」「平和」という「生きる価値」や、「原爆体験の受け止め方」のうち「運命」「生かされているという気持ち」などに至ったのは、苦しい体験に耐え、乗り越えることが「心的外傷後の成長」をもたらしたからであると考えられる。自由発言からはそれらの多様な背景を知ることができた。

(5) 本調査は、被爆者がこれまで人に語る事が困難であった体験や思いを表出し、受け止められる機会にもなり、その結果、心が軽くなった対象者が少なくなかった。

#### 5. 今後の課題

研究(1)、研究(2)の結果を踏まえ、さらに被爆者の人生を支えたものが、いつ、どのような過程を経て形成されたのかを明らかにするために、再び半構造化面接を実施し、そのプロセスを詳細に検討する予定である。

付記：本研究は、広島市健康福祉局原爆被害対策部調査課のご協力のもとに研究の機会を得ることができた。また、被爆者の方への聞き取りに当たっては、広島県臨床心理士会会員87名のご協力を得た。記して感謝いたします。

なお、本研究は2010年度に日本心理臨床学会から研究助成を受けたものである。また、本論文は2012年の同学会第31回大会にて発表した内容(森田・中嶋・丸・大澤・倉永・財満, 2012)が元になっている。

#### 参 考 文 献

- 池埜 聡, 中尾賀要子 2007 在アメリカ被爆者の援護と研究課題—心理社会的視座からのアプローチ— 関西学院大学社会学部紀要, 102, 85-100.
- 中嶋みどり・丸藤太郎・大澤多美子・倉永恭子・財満義輝・森田裕司 2011 ヒロシマ原爆被害者の六十余年の人生を支えた諸要因(1)—被爆者と非体験者のKJ法による比較— 日本心理臨床学会第30回大会論文集 651.
- 森田裕司・丸藤太郎・大澤多美子・倉永恭子・財満義輝・中嶋みどり 2012 ヒロシマ原爆被害者の人生を支えたもの(1)—被爆者と非体験者のKJ法による比較— 広島経済大学研究論集, 35(2), 79-84.

森田裕司・中嶋みどり・一丸藤太郎・大澤多美子・倉  
永恭子・財満義輝 2012 ヒロシマ原爆被害者の  
六十余年の人生を支えた諸要因 (2)―自由発言か

らみたキーワードの意味― 日本心理臨床学会第  
31回大会論文集 396.